

消防士はがんばった(1995年3月号掲載・今村 明)



このたびの地震では、もっと早く消火し、もっと多くの人を助けたかったと消防士全員残念に思っています。被災された方々には心よりお見舞申しあげます。

でも、消防士一人ひとりには精一杯活動した。身内を褒めるのも変な話だが、改めてみんな頑張るなあと感じた。

通信手段も交通手段も途絶え、あるいは自宅が被災しても消防士は一刻を争い仕事に行った。

灘消防署でも当直の隊員以外の77名に対し非常招集がかかり、ほとんどの職員は自発的に参集し、10時までに50人以上が灘消防署に駆けつけることができています。

地震当日には灘区内で16件の火災が同時に発生した。灘消防署にはポンプ車は予備車を含めても6台しかない。可搬式動力ポンプも2台。16件の火災に対して水を送れるポンプはすべて合わせても8台ということになる。しかも、消火栓はすべてダメ、防火水槽も数基は被害を受けたが、頼りは防火水槽、学校のプール及び川の水だけだった。60人ほどの人員で灘消防署にある

ホースはすべて使い切り必死の消火活動だったが、結果的には、圧倒的な火勢の前に道路を利用した延焼阻止を行うのが精一杯という火災が5カ所も発生した。

さらに本当に申し訳ないことだが、消防車が消火に駆けつけることもなかった火災も数件あった。そうした現場では、消防団や地元の方々がバケツリレーなどでなんとか延焼をくい止めてくれた。

一方で、灘区内だけでも一万棟を超える全壊、半壊の家屋があり、至るところで救助を求められた。40人足らずの救助隊、救急隊を中心に、休む暇もなく次から次へと救助活動を実施した。とは言っても、神戸消防の有している資機材には、コンボやクレーンのような重機はないので、結局、チェーンソーやバールが主な道具という状態で人力が頼りだった。その結果、17日だけでも100人以上の方々を救出した。中には残念ながらお亡くなりになっている方もいたが、80人近くの方々を生存救出できた。17日の救出現場での生存率を考えると、もっと救助の人手があればと悔やまれる。

市民の皆さまにぜひ知っていただきたいのは、消防は早いといわれるほどではないかもしれないが、17日の午前中には東京や大阪などの消防車が神戸市の応援に出発してくれた。非常な道路渋滞に巻き込まれて、少し到着は遅れたが、17日夕方には応援隊も到着し、おそらく、他のいろいろな応援隊と比較しても一番早い方だと考えている。

18日以降は、多くの他都市の消防隊、救助隊、救急隊の応援を得て、急ピッチで消火活動、救助活動に当たった。水が不足しているので、すべての火災を鎮火するのに3日間かかった。その間

は、本当に寝る間も食事をする間もないという状態であった。救助活動も、全国各地の救助隊の応援をいただき、自衛隊と地域分担して実施していった。初めは、まだ声が聞こえるという現場を最優先に、確実に人が埋まっているという情報のあるところ、そして最後には、しらみつぶしに倒壊家屋内を調べていった。

こうした状態で 10 日間ほどが過ぎた。日ごろから体を鍛えている消防士といえども体力の限界を感じた。特に頑健な救助隊員でも過労で倒れ入院するなど、ダウンする隊員も次々と出てきた。思い出してみると、汚い話だが、水の 1 滴も飲まずに活動していたため、初めての 24 時間で小便に 2 回しか行かなかった。さらに悪いことに、ドロドロに汚れても水がなく手を洗うことも、うがいをすることも難しい状況で、風邪まで流行ってきた。

こうした最悪の状況の中でも、すぐ近くの金沢病院の協力を得て、点滴を打ちながら頑張った隊員が多くいた。

救助作業が完了し、ようやく 2 月になり仕事も少し落ち着きを取り戻し、隊員も体力を少しずつ回復しつつある。確かに組織の問題、人員・資機材の不足の問題などがあり、市民の皆さまに対して十分な消防の責任を果たせなかったことは、心から申し訳なく思う。しかし、消火活動に、救助活動に、救急活動にと全力を出しつくした消防士は、頑張った。災害現場の経験の少なかった若い隊員も、ぐっと頼もしくなった。この経験が無駄にすることなく、より素晴らしい神戸消防に生まれ変わることを固く決心している。